

第39回電気通信普及財団賞 受賞論文 ～テレコム人文学・社会科学賞～

<順不同、敬称略>

※受賞者の所属は論文・著作発行時のものです。

入賞（賞金 100 万円）

「政治の話」とデモクラシー：規範的効果の実証分析」

（書籍発刊：有斐閣，2023年3月）

横山 智哉 金沢大学人間社会研究域法学系 講師

本書は、人々の「政治の話」を主に家族などからなる親密圏での「政治的会話」と公共圏での「政治的議論」に分けたうえで、それぞれが政治参加や政治寛容性に及ぼす効果を実証的に分析し、そのメカニズムを一定程度明らかにしたことが高く評価できる。その成果は主権者教育、ひいては民主主義のあり方に関して一つの方向を示すものである。今後、オピニオン・リーダーの存在の問題、インターネット上での「政治の話」の役割と今後の動向、効果の測定手法の改良など、さらなる研究の進化を期待したい。

入賞（賞金 100 万円）

「プライバシーと氏名・肖像の法的保護」

（書籍発刊：日本評論社，2023年7月）

齊藤 邦史 慶應義塾大学総合政策学部 准教授

本書は、電気通信ネットワークやデータベースによって個人情報収集され、それを通じて人格そのものが捕捉されることからの保護の必要性を検討を加えた優れた研究書である。なかでも、私人間におけるプライバシーの保護について「自律としてのプライバシー」と、「信頼としてのプライバシー」の複合により構成するという新しい解釈論を提示している点が高く評価できる。テレコム人文学・社会科学賞の入賞に値する研究書である。

入賞（賞金 100 万円）

「スマホで YouTube にハマるを科学する アーキテクチャと動画ジャンルの影響力」

（書籍発刊：日本経済新聞出版，2023年3月）

佐々木裕一 東京経済大学コミュニケーション学部 教授

山下 玲子 東京経済大学コミュニケーション学部 教授

北村 智 東京経済大学コミュニケーション学部 教授

本書は、「スマホで YouTube にハマる」という状況を、YouTube の7つのアーキテクチャクラスと視聴動向の7つのジャンルに別けて定量的に分析、今後の動画視聴傾向を予測するものであり、その独創性は高く評価できる。引き続き、7つのクラスがアルゴリズムにより一方向的に管理・誘導されていくのか、それとも利用者側の選択を通じて、アルゴリズムへの能動的な（アップリンク的な）働きかけが見られる可能性があるかなどについて、分析・検証されたい。



奨励賞（賞金 50 万円）

「メディア変革期の政治コミュニケーション：ネット時代は何を変えるのか」

（書籍発刊：勁草書房，2023 年 3 月）

大森 翔子 公益財団法人 NIRA 総合研究開発機構 研究コーディネーター・研究員

本書は、日本における政治コミュニケーションについてマスメディアに限らずポータルサイトを含めて分析した書である。新聞を中心とする伝統的なコミュニケーションに対し、映像メディアによるソフトニュース化が政治コミュニケーションの入り口的効果を果たすか、信頼性に問題はないか等について実証分析を行っており、高く評価できる。学術性を維持しつつ、一般の人にも読みやすく、理解しやすい良書である。若手研究者であり、今後のさらなる研究を期待してテレコム人文学・社会科学賞の奨励賞とした。